

私は彰子と共に、牛乳風呂の中に浸かっている。

私達二人は、先程この風呂場の中で味わい尽した、性交の快樂の余韻に浸っていた。彼女の胸の鼓動はようやく普通に戻り、時折腰を震わせていた痙攣もおさまりはしめている。

目を閉じ、全身を湯船の中でくつろがしている彼女は、満足しきった女の微笑みを浮べていた。私は、そんな彰子に覆い被さるような格好で、彼女と身体を重ね合わせて湯船の中に横たわっている。軽い疲労と、快感の余韻が性器と腰の辺りにわだかまっていた。

磨りガラスを通した陽の光が、まともに私の背中に当り、湯とは別の種類の暖かさを感じる。湯の中に混ぜられた香水の匂いが香り、私はその香りと彰子の香りを吸い込む。微かな気だるさにも似た感情が湧きあがってきた。

温かく静かな風呂場の中に、微かな湯の音がして、彰子が私の胸に手を這わせる。

「まだ貴方のものが、私の中に入っているように思えますわ……」

彼女が囁くように耳に声を吹き込み、私の片方の乳首を弄る。頭を、甘える子供のように胸にあずけ掛けてくると、黒髪が湯に揺れた。

私は、彼女に視線を向けないままに話す。

「御主人を裏切らしてしまいましたね……」

彰子が頭を上げ、私の目を見詰める。

「いえ……、主人はあの世で喜んでいると思えますわ……」

「喜ぶ？」

視線を彰子に向ける。

「ええ……。生前、主人は貴方の事をよく話していましたわ……。自分と同じ種類の人間だと。だから……」

「私の事を話していた……宗方先生が？」

私にとって、その彰子の言葉は以外なものだった。私と亡くなった教授とは殆ど個人的に会話を交わした事も無く、教授とその一書生といっただけの関係でしかなかった。

「そう……。主人は生前、貴方は自分と同じ匂いがすると、言っておりました……」

「……だから」——「だから貴方は私を招いたのですか？ 京都であのような事件を起して大学を追われた私を？」

彰子は少し考え込むような表情を見せ、そして肯く。

「そうですね……。貴方の事を耳にしたとき、私はすぐに貴方を神戸に呼ぼうと決心しました。そう……。多分、貴方の京都での事が、その決心の一つの理由であったと思いますわ……」

「では貴方は、御主人の代りとして私を呼んだのですか？」

「代り？ 代りではありませんわ……。私には、私と雅美には、生前の主人のような男の方が必要なのです……」

「宗方先生のような人間……」

私は暫し考え込む。いったい彼女は何を言っているのだ？

問い返そうとした私に、彼女が顔を寄せ唇を寄せてくる。舌が、私の歯を割って舌をまさぐり、絡み付いてくる。

彼女は私の舌を十分に味わい、そして唇を離す。

「……きつとお解りになりますわ……。あの、主人が生前使っておりました離れの部屋に滞在なさっている……」

そう言った彰子が、私に謎めいた微笑みを向け、そして立ち上がる。

私は、決して見飽きる事が無いだろう彼女の裸体を、湯船の中から見上げる。

「身体を洗って差上げますわ……貴方」

そして、微笑。

風呂場の外、引戸の前の廊下にエンプーサが寝そべっている。黒猫は風呂場の中から湯の音が聞えだすと身を起し、歩み去った。



夜

食堂に明るい光を放つシャンデリアの下、私達三人は夕食を終える。

私は食後の紅茶を飲みながら、今朝、雅美がこの食堂のテーブルの上で繰広げた痴態を思い返していた。その記憶は、昼間の風呂場での彰子との性交の後からずっと、私の中でくすぶり続けている肉欲を刺激する。

そんな私に彰子が、私のそんな感情を見透かしたような視線を向ける。その事がまた、私の欲望を助長した。

彰子と私が紅茶を飲干し、テーブルの上の汚れた食器を雅美が片付けだした時、彰子が言った。

「お食事の後、お酒でも如何ですか？ 良いブランデーがありますのよ」

彰子の誘いを予想していた私は、彼女に視線を向け、肯く。

「夜は長い……。頂きます」

「いえ……。楽しい夜は短いものですわ……」

彰子が妖艶さが透けて見える微笑みを浮べる。目は笑ってはいない。

「確におっしゃる通りかもしれませんが……。で、今夜は？」

彰子が、微笑みを顔に浮べたまま、私の前の食器を下げる雅美に視線を向け、言う。

「雅美、隣のお部屋の用意をお願いね……」

そして私に視線を返し。「御期待には背きませんわ……。貴方……」

雅美が、私の向ける視線から目を逸らす。

食堂の隣の居間に、私と彰子が移動する。

居間は、この屋敷に相応しいものだった。全体が彫刻の一部であるように作られた電灯が天井から明るい光を放ち、壁に掛けられた欧州のものらしい振り時計が、重々しい音で時を刻んでいる。

床には凝った刺繍が施されたペルシヤ絨毯が敷詰められ、その絨毯の上には重く、どっしりとした造りのソファが二つ壁際に並べられている。そしてそのソファの前には、マホガニー製の小さなティテーブルが一つ置かれていた。

私はその居間に入った時、それらの家具の配置に奇妙な感じを覚える。

テーブルとソファは、部屋の中央ではなく、壁際に寄せた格好で配置されている。つまりテーブルの前には、不自然な、なにも置かれていない絨毯だけの場所があるのだ。

そうそれは、ソファに座った者が、その前の絨毯の上で行われる何かを見学し、楽しむ為の配置であった。

私は彰子と共にソファに腰を下ろす。

途端に彼女は、身体が密着するほどに私に身体を摺り寄せてくる。彼女のほのかな体温と香りが私の鼻孔をくすぐり、太股にその手を感じる。

彼女が私の耳に顔を寄せ、囁きかけてくる。それは私に語りかけるいうよりも、息で耳を愛撫し、欲望を昂めようとする行為のように思えた。

「雅美を……。あのこを、今夜は貴方にお任せしますわ……。存分に楽しみ、楽しませてやって下さい……。あのこの癖、御存じですわね……」

歯が私の耳たぶに当り、舌が耳口に触れる。

私は、彰子の目を横目で覗きこみ、そして肯く。

はつきりと態度に表した事で、私は私の中の、暗く陰媚な欲望を自ら開放する。昼間の、あの文章を書いた後に想像した雅美の姿が心に去来し、衝動が生じる。

雅美が、グラスとブランディの瓶を乗せた盆をもって居間に入ってきた。

私と彰子がソファで身体を密着させている事を見て取り、一瞬彼女は歩みを止めるが、すぐに気を持ち直し、メイドの顔となってテーブルの上に二つのグラスを置いた。

「お注ぎいたします……」

私の探るような視線を避け、雅美がブランディの瓶を取り上げる。

ブランディはカミユであった。その有名な作家と同じ名を持つ濃厚で豊潤な琥珀色の液体がグラスに注がれ、香り立つ。

私は彰子と共にグラスを取り、軽く掲げる。微笑んだ彰子がそれに答え、二人はグラスを傾ける。

私の口内に熱く濃く、豊かな刺激が広がり、喉にすべり落ちて行く。

一気に飲干してしまうのを止めるのに、努力がいった程にそれは美しい味であった。

私はグラスをテーブルに戻し、雅美に命じる。

「瓶を置いて……、脱ぐんだ」

雅美が一瞬、身体を凍り付かせる。彰子が私の太股に置いた手をずらし、スポンの上から股間に触れる。

私は、その手の動きを意識しながら再度、雅美に命ずる。

「服を脱ぐんだ」

雅美が、彰子に救いを求めるような視線を向け、そして悲しみに泣く時のような表情を浮べる。

私の中の暗い衝動が、その彼女の表情に刺激される。

見詰める私の視線を感じ、雅美がカミユをテーブルに戻す。その手は細かく震えていた。半分ほどになったグラスを持ち上げた時、雅美が自ら服のボタンを外しはじめた。

私は、見詰める私の視線から懸命に目を逸らしている雅美の姿を楽しみながら、豊潤なカミユの味を楽しむ。

彰子がソファの下から、黒い革性のアタッシュケース程の大きさの取っ手の付いた箱を取り出す。彼女がその箱をテーブルの上に乗せると、雅美の服を脱ぐ手が止まった。

「……」

雅美が押え切れない嗚咽を漏らす。

そんな彼女の反応を楽しむように、彰子が微笑みを浮かべ、箱を開く。その中に収められていた品物に、私は目を引き付けられる。

鈍く銀色に輝く二つの手錠。革製の、細く鋭い1本の鞭。通常の男のものよりも大きく醜悪に作られた木製の陰茎。そして細い筒状のケースに収められた数十本の針と、小さな瓶に入った薄青い色をした軟膏。

それは雅美の身体を苛む為の、淫具であった。

彰子が、嗚咽を押し殺し表情を歪ませている雅美に向かって笑みを浮かべる。

「この道具を男の方に使ってもらうのは久しぶりよね、雅美。貴方がこの道具でどれほど淫らになり、快楽に泣いて、よがり狂うかをこの方に見せてさしあげるのよ……」

彰子の手が、私の勃起しはじめている陰茎をスポンの上から擦り上げる。

私がテーブルの上の箱の中から鞭を出し、その強靱さを確かめるように手に取ったとき、彰子の指がスポンのフラスナーを下ろした。

雅美の服が床に落ち、そこで折り重なる。

下着姿を私と彰子の目に晒した彼女が、僅かの躊躇の後、ブラジャーを外しはじめる。

彰子が、開いた私のフラスナーの中に差し入れた手で直接淫茎に触れてくる。彼女がゆつくりとそれを摩り上げながら、私の耳に囁きかける。

私はその言葉を聞いてから、ブラジャーを取った後、両手で乳房を隠している雅美に命じる。

「下穿きを脱いで、渡すんだ。奥様の言葉通りに、お前がもう秘部を汚しているかどうか、確かめてやる」

雅美が首を小さく振り、小声で拒否の言葉を囁く。

私は、強靱な鞭を両手で折り曲げるようにして持ち、その弾力を確かめる。

雅美の弱々しげな拒否の言葉に触発されたのか私は、彼女に鞭を振るい、苦痛を味あわせ、哀願させ、涙を流すその姿を見たいという、獣的な欲望を感じ、それが急速に成長していくのを感じる。

彰子が、私のそんな残酷な欲望を更にかき立てる為に、手の中の勃起した陰茎の亀頭の部分に指を這わし、その表面を擦りはじめる。

私は、内からの衝動を秘め、低く押し殺された静かな声で、雅美に命じる。

「胸の手をどける……」

その私の口調に、雅美が表情を凍り付かせ、腕を胸から離す。

開放された乳房が、その張り詰めた弾力を誇示するかのよう弾む。

私は雅美の乳房を見詰める。その先端では乳首が頭をもたげていた。私の中の衝動が一気に弾ける。

私は、股間の彰子の手を振り払うようにして立上がり、雅美の乳房に向けて鞭を振りあげる。空気を裂くときの音が聞え、鞭の先端が、雅美の乳房の上で鋭い音を発した。

「あっ！」

雅美の甲高い悲鳴がそれに続く。

私は、反射的に鞭を避けようと身を翻す彼女に向けて、再び鞭を振るう。鞭は二度乳房に命中し、三度目は彼女の背中に赤い筋を引いた。

雅美がその場に座り込み、すすり泣く声を上げはじめる。

私は、昂ぶりによる興奮の荒い息を吐きながら、彼女を見下ろし、宣言するように言う。

「雅美。私は奥様のように二度は言わない、一度だけだ、逆らったらお前の身体、引裂いてやる」

雅美が、涙を溜めた瞳を私に向け、そして肯く。

私はそんな彼女の瞳の中に、苦痛と屈辱と、そしてそれを味あわされる事に快感を覚える彼女の性癖を見る。

雅美が私に肯いた後、更に言う。

「はい。御主人さま……、おっしゃる通りに致します……」

雅美が立ち上がり、おずおずとした動きで下穿きを取る。

私は、雅美の差し出した下穿きを取り、それを裏返す。

そこからは女の匂いが微かに漂いだしていた。彰子の言葉通り、雅美は下穿きを女の蜜で汚していた。

私はソファに再び座り、目の前で全裸を晒す雅美に向かって言う。

「自分が責められる為の道具を見て、鞭を乳房に受け、その屈辱に蜜を吐くほどに欲情する女か」

——「望み通りにしてやる。お前を満足させてやるぞ、雅美」

隣で彰子が低く、くぐもった笑い声を上げた。

短い夜が、はじまった。

以下、次回へ